

## 巻頭言

# 「実学」の歴史的意味

九里学園理事長  
九里 幾久雄

「実学」とか「実業」と言うと、それは「経済（商業）」の同義語として今日では考えられている。確かに九里学園も初期の頃「浦和実業専門学校」と呼ばれた時代があり、「簿記、珠算」を中心とした学校だった。

しかし、「広辞苑」の定義では「応用を重んじ実際に役立つ学問」として「法律学、医学、工学」があげられ、「経済」は無い。「日本国語大辞典」では「知識や技術がそのまま社会生活に役立つような学問」とより具体的になり「商学、工学、医学」ではじめて登場しているが、両書とも「医学」が重視されている。何故だろうか。

江戸時代の思想の中で実学思想は様々な形で多義的に用いられているが、「有用性」という事では共通している。

この実学が思想だけでなく、現実の政治や社会問題として重視されたのは、実に八代將軍吉宗の享保の改革に組み込まれてからであった。日本の経済発展を一大目的とする吉宗は、朱子学や詩文などを中心とする江戸の学問の他に西洋の科学技術の研究を大胆に取り入れる政策にふみきったのである。

「鎖国」下の江戸時代は自由貿易の制限の他に「洋書の禁」といってキリスト教思想の導入を防止する為、32種の欧米の書を研究する事を禁ずる祖法が守られていた。

吉宗の打ち出した「洋書の禁の一部を緩める」の策は、19種の宗教に関係のない農学などの技術書で、まず学者に命じ長崎の通詞の元へオランダ語を学習させることから始まった。ここに青木昆陽、野呂玄丈の二人の本草学（薬学）者の登場を見る。

青木の「オランダ文字略考」は日本最初の蘭日辞典で、蘭学がはじまったのである。確かに「すぐ実用に役に立つ」と言えば、「お握り」の握り方だの日曜大工の技法などの手作りばかり考えるが、その背後にはもっと遠大な時代や国家社会の必須の要請に答える学問体系が求められたのであった。

余りも有名な青木の飢饉にそなえる為「小石川菜園での甘藷<sup>[1]</sup>」の栽培もさることながら、蘭学の繁栄は西洋医学、解剖学<sup>[2]</sup>の分野であった。草わけの蘭学医が本草学（薬学）者であることもあったが、人間の生命・健康が何よりも重大であることは指摘するまでもないだろう。

実学（実業）が経済、商業の分野に焦点化したのは福沢諭吉以来であるが、それは明治日本の最大の課題が富国（経済の開発）であり、それなしには国の独立も全う出来なかったからである。今日、日本の国家的時代的課題は何であろうか。言うまでもなく新しい「福祉」

「保育」の分野もその一つである。少子高齢化に対応した本学の背負う学問・技術はまさに今日の実学の到達目標であり、建学の精神は依然として生きているとってよい。

#### 注

- [1] サツマイモの味が栗（九里）に似ているというので当時（八里半）と呼ばれた。
- [2] 日本最初の解剖学書（ターヘルアナトミア）を翻訳した中心人物前野良沢は青木の一番弟子である。